

5ヶ月間の天津師範大学滞在から学んだこと

美術教育講座 教授 山田康彦



News from TNU

日本語教育を中心とした天津師範大学との合作弁学事業は 2006 年度から開始され、6 年目を迎えています。その間三重大学からは常に 2 名の教員が長期滞在し、この事業を支えてくださっています。三重大学や教育学部の将来にとって、こうした取り組みがぜひ必要と考えてきたので、機会ができたらずひ参加したいと思い、今回行かせていただきました。外国に約半年も長期滞在するのは初めてのことで、今回の経験から多くのことを学ばせていただきました。

特に一つは、日本語とその教育に意識的になれたことです。外国人に対する日本語教育は、私たちが小・中学校で習ってきた国語教育とは文法の教え方などがまったく異なっています。私は不勉強で、天津に行くまで、詳細をほとんど知りませんでした。私が担当した授業の一つは、週 2 回の 1 年生の日本語会話です。会話といっても、一応テキストがあります。しかし中国の学生がテキストにある日本語をどのように教えられているのかを知ったうえで授業に臨みたいと思いました。そうした授業準備に少し時間がかかりましたが、国語文法しか知らず、しかもその印象は決してよかったとは言えない私には、大変新鮮でした。「ます形」「た形」など実用的な体系になっていると思いました。国語教育と日本語教育のどちらの方が適切かというのは、その問い自体が妥当とは言えません。どちらも長短を併せ持っているように思えました。しかし少なくともそれぞれを相対化できる視点を持てたのは大変刺激になりました。

日本語会話の中では、その他にも、「が」と「は」はどのように使い分けるのか、「まで」と「までに」はどのように違うのか、

など専門家でない限り、不断はあまり自覚していないことを質問されるので、そのことでも日本語に意識的になります。また、授業を始めた 3 月にはほとんど私が話しかける日本語を理解してくれなかった学生たちが、個人によって波長に違いがありますが、ほぼ 2 ヶ月毎に「あれ！できるようになっている」と変化がわかり、帰国する 7 月にはかなり上達してきたのを実感できるという醍醐味を味わいました。このように短期間に能力アップを実感できるのは語学教育ならではかもしれません。

私は、「教育」方法としてワークショップに関心をもっています。三重大学の授業では、そのワークショップの方法の中でも、やはり美術系のものを活用することになります。しかし、天津では、これまで遠慮していた言葉遊びや演劇的なワークショップの方法を活用することができます。毎回そうした内容を取り入れ、最後には 4 人 1 組で脚本を作り、劇を演じて授業を終えました。三重大学の自分の専門では十分活用できなかった教育方法を実際に使ってみて、その効果を確かめることができたのも楽しい収穫でした。

考えさせられたもう一つのことは、アカデミック・ジャパニーズを育むということです。3 月の東日本大震災とその際の原発事故の影響で 3 年生の来日が半年延期になりました。そのため急遽 3 年生のために日本語読書の授業を担当しました。その際、どのような内容にするか東晋次先生と相談しました。その結果、一般的な読書のテキストを使用するのではなく、三重大学教員用事務室にある本の中から自前で選んで使用する文献を決めることにしました。なぜならば、3 年生は既に卒業研究のテーマを考え、取り組もうとしている段階だったからです。そうした学生には、一般的に少し難しめの日本語文献を読んで解釈するような授業は適切ではなく、大学での研究に刺激を与え



山田先生とともに天に向かって大きく手を伸ばす元気な天津師範大学生 (DD 第 3 期生)

るような内容が求められたからです。具体的には、言語論、日本語教育論、日本社会・文化論などをなるべく多角的に捉えるような文献を用意しました。そして、授業の中では、時には、西洋と日本における国家・社会・市民の関係把握の違いや、理性と感性といった西洋的な思惟の枠組みとその現代的課題といった内容まで取り扱うことになりました。その授業を通して感じたのが、一方で学生たちがそうした理論的な問題に大変関心があるということと、しかし、同時にそれでも大学生らしい視野の広い教養が十分ではないということです。そこで改めて考えさせられたのが、大学における日本語教育のあり方です。つまり、大学で外国人に日本語教育をする場合には、たんに一般的に日本語が上達するのが目標ではなく、日本語を習得するのは当然ですが、そうした日本語を使って学問をする、つまりアカデミック・ジャパニーズを修得するようにしていかなければならないのではないかとということです。日本語を身につけることによって、自国語を知っているだけでは及ばないような幅広くかつ専門的な知識や思考力を身につけていけるということにならないといけないのではないのでしょうか。そうしたアカデミック・ジャパニーズを身につけることによって、実ははじ



東先生を囲んで(DD 第2期生)

めて仕事も含めて社会的に本当に役に立つ日本語を使用できるようになるのではないかと思います。そういう点では、継続的に三重大の教員が天津に常駐しているのは、大変大きな意味があると感じました。

考えさせられたこととして、最後に指摘したいのが、大学の国際化のスタンスです。天津師範大学に限らず、中国の大学に行くと、多くの留学生と出会います。欧米、韓国、東南アジアだけでなく、南米やアフリカからの留学生も目立ちます。中国は現在、中国語を世界に広める国家戦略を展開しています。世界各地で中国語教育を実施し、同時に短期・長期の様々な形で留学生を受け入れています。これらの留学生と接して感じたのは、中国語を学ぶということは、中国の政治、社会、文化を理解する、さらに中国に親しむ人々が世界で広がっていくということではないかということでした。日本の大学の国際化というと、研究レベルでイメージすることが多いように思えます。自他の留学生が増えることや教育に与える影響については、労力がかかるために、それほどポジティブに受け取られていないように思えます。しかし世界で日本語教育を展開したり、留学生が多くなることは、たんに研究面でメリットがあるだけでなく、日本の政治・社会・文化を理解し、日本に親しむ多くの人々を生み出すこととなります。そのことがこの国の存在意義を高め、結局は守っていくことになると痛感しました。日本の大学の国際化のあり方を考えさせられました。

最後に、長期派遣に快く送り出してくださった美術教育講座の先生方や学生たち、そして初めての経験で不慣れな私を様々な支援・指導してくださった東晋次先生と天津師範大学の先生方、そして教育上及び事務的に様々なご迷惑やご面倒をおかけした教育学部の教職員の皆様に深く感謝申し上げます。

海外大学訪問

5月上旬、須曾野仁志先生がネブラスカ大学とブレスコット小学校を訪問されました。

ネブラスカ大学訪問

教育実践総合センター 教授 須曾野仁志

2011年5月4日から9日、国際交流担当の江原副学長と米国ネブラスカ州リンカーン市を訪れました。リンカーン市にはネブラスカ大学リンカーン校があり、本学と今年1月に学術協定が締結され、まず教職員レベルでの国際交流が始まりました。5月の主な訪問目的は、両校の国際交流の話し合いとリンカーンにあるブレスコット小学校での日本人形贈呈式に参加するためでした。

5月上旬のネブラスカ大学はキャンパス内に新緑があふれていました。1月から始まった第2学期の最終試験期間中で、テスト勉強に励む学生の姿が目立ちました。

この大学博物館には、答礼人形「ミス三重」が大切に保管されています。80年以上前、日米交流のため日本中の小学校「青い目の人形」が送られました。そのお礼に米国各州に答礼人形が送られたのですが、三重県からの人形はネブラスカ州に残っています。私たちも大学博物館を訪れましたが、博物館は恐竜展示を社会見学でやってきた小学生で賑わっていました。

ブレスコット小学校での人形贈呈式は5月5日午後に関われました。青い目の人形「メリーちゃん」が現存する伊賀市立河合小学校が、ネブラスカ州の小学校に日本人形を送る取り組みを進めてきました。もともと、今年の3月13日に松岡理事・副学長（本年3月まで）と私がブレスコット小学校を訪れ、河合小学校からの人形を贈る予定でしたが、大地震のために出張キャンセルとなりました。



須曾野先生と河合小学校平岩校長

5月5日、河合小学校平岩校長はじめ3人の先生方、江原副学長と私、そして、答礼人形ミス三重の会の方々ブレスコット小学校を訪れました。小学校では、講堂で全校児童と先生方が私たちを歓迎してくれました。平岩校長先生の挨拶のあと、私が制作した河合小学校紹介のビデオ（デジタルストーリーテリング）上映、そして、ブレスコット小学校ワイリー校長先生への人形贈呈。その後、講堂では子どもたちが「さくらさくら」「It's a small world」を踊り付きで歌ってくれました。日本語、そして、英語での子どもたちの歌声を私たちはずっと忘れないでしょう。

80年以上前に始まった青い目の人形の交流、日本からの答礼人形の長い歴史... 三重大とネブラスカ大学リンカーン校との交流の歴史は今年から始まりましたが、人形交流をきっかけに数多くの学生や教職員がネブラスカや三重を訪問し合ったり、交流活動を継続することを願っています。



ブレスコット小学校前にて

本題はさておき、8月30日の鄭州空港。河南省出張に同行させて頂いた朴恵淑理事・副学長がソウルに向かうのを見送ったあと、国内線エリアに移動。あとは上海で乗り継いで帰国するだけだ。電光掲示の出発便リストで搭乗便を確認……できない！ 上海（浦東）行き 12:50 発なのだが、それらしい数字が見当たらない。いやーな予感。急ぎカウンターへ。「キャンセルです」。ごくあっさりと言われて、拍子抜けするぐらい。「中国の国内線は危ないときは飛ばないので安全だ」とは聞いていたが、まさか今日のこの便とは。11:30 発の上海（虹橋）行きがあるからそれに乗れというのでチェックイン。いまはもう11時過ぎ。なかなか進まないセキュリティー・チェックをようやく通過してダッシュで5番搭乗口へ。出発遅延のため余裕で搭乗。ここは「危ないときは飛ばない」に助けられる。虹橋からバスで浦東へ移動。このときもトラブルに見舞われたが、ごく軽微なものなので割愛（聞きたくなるでしょ）。まあ、そんなこんなで帰ってきました。中部到着が遅延し、その日のうちには津までどり着かなかったけれど。



楊副学長（河南師範大学）と朴副学長（三重大学）

さて、そろそろ本題へ。27日に中国入りして河南師範大学のある新郷市に到着。翌28日の午前中、楊林先生（副学長）、李秋発先生（国際交流センター長）、端木慶一先生（国際交流教育学院長、珍しい姓、子貢の末裔だそうです）、劉徳潤先生（日本文学研究所所長）とお会いし、教育・研究面での交流の発展に向けて、その足がかりとなる有意義な話し合いを行いました。会談では、丹保健一先生、早瀬光秋先生（2005年の学部間協定締結時に訪問）、松岡守先生（2008年の大学間協定締結時に訪問）が両校間の交流に果たされた大きな役割も話題となり、友好的な雰囲気の中で率直な意見交換を行いました。三重大学は、これまで多くの留学生と研究者を河南師範大学から受け入れてきました。今後は、具体的な教育・研究活動にかかわって、とくに三重大学の学生と教員が河南師範大学を訪問することが望まれます。環境分野等での三重大学の協力への期待は大きく、具体的な活動実現の可能性は大きいと感じました。

28日の午後に省都である鄭州市へ移動。翌29日は、同市で開催された三重県と河南省の友好提携25周年の記念行事に参加。鈴木英敬三重県知事、郭庚茂河南省長をはじめ多数の関係者の出席のもと、県省レベルでの交流のさらなる拡大に向けた取り組みの実施が確認されました。

私にとっては、はじめての河南省訪問でした。今回の訪問では、河南省の古代中国の中心地としての面に触れる機会には恵まれませんでしたが、充実した4日（5日？）間となりました。



天師大の裏通りで見た夕日

天津師範大学語学研修・文化交流

3月、第8回天津師範大学語学文化研修が林先生と伊藤先生の引率のもと行われました。

夕日がきれいな街 天津

理科教育講座 准教授 伊藤信成

3月6日から20日までの15日間、天津師範大学で行われる中国語研修の引率として天津に滞在した。これまでも多くの先生方が天津師範大学や天津市内の様子を報告されているが、やはり百聞不如一見である。私にとって天津は初めての訪問だったが、その印象はタイトルの通り“夕日がきれいな街”である。赤く色づいた夕日が沈みゆく様子を天津で何度も目にすることができた。写真は天師大裏の某有名餃子店前で撮った夕日である。並木越しに見えるきれいな夕日に無心にデジカメのシャッターを切る私の横を、学生たちはいそいそと餃子店に入っていくのであった（夕日きれいだよー）。

何度も夕日を目にするうちにはたと思う。“どうして天津は夕日がきれいなのだろうか？” 仕事柄、夕日が赤く見える理由は毎年学生に話をするのであるが、理科はやはり観察が大事。“体験と結びついてこそ理解が深まるのだ”と日頃学生にそれっぽいことを言っているのであるから、ここはやはり理由を解明せねばならない。夕日が赤く見えるのも空が青く見えるのも、基本は大気中でレーリー散乱と呼ばれる・・・紙面の関係で以下略。まとめるとカラッと晴れてちょっと汚れた空気の時に夕日は赤く見えるのだ。そう考えれば、確かに天津は大陸の東端にあり、日の沈む西側には大陸の乾いた気団がある。かつ北京市と天津市の上空を覆う排気ガス、さらに春先は黄砂とエアロゾ

ルが舞い放題で、赤い夕日が見られる条件がそろっている。したがって、ほぼ教科書通りに現象が説明できるのであるが、何となくじっくりこない自分がそこにいる。

語学研修では、1週目の週末に北京の市内見学に行くのであるが、北京から天津に戻った際に、じっくりこない理由が明らかとなった。すなわち“夕日が赤い”と“夕日がきれい”は同値ではない、“赤けりゃいいってもんじゃないよねえ”ということである。となると、今度は“きれい”な理由を考えねばならないのであるが、“きれい”は主観的な感情であるので、議論するためには、まず“きれい”を定義する必要がある。しかし、細かい議論をするだけのスペースはないので、日本国内の夕日がきれいな街との共通点を探してお茶を濁すことにする。国内で夕日がきれいな街といえば、(年代にもよるだろうが、私の年代では)栃木県足利市であろう。森高千里が“夕日がきれいな街”と唄ったところである。足利市は市の中央を渡良瀬川が流



課外活動で天師大新キャンパスを見学

れていて、広い河川敷のために都市の中にぽっかりと空が見える空間が広がっている。その他、国内の“夕日がきれいな場所”のほとんどが海岸、湖、山岳であった。極論すれば西側の空が開けている場所は、夕日がきれいな場所として売り出せるのである。今回、天津市中心部にはあまり行かなかったが、天師大八里台キャンパス付近は、水上公園に加え、天師大の建物の多くが取り壊されていたこともあり、空が開けていた。また研修を行った人文江南キャンパスも、周囲に高い建物はなく、視界を遮られることはほとんどなかった。国内との比較から考えれば、中国第3の都市の中にあつて、ぽっかりと空が開けた空間が点在していることが、“夕日がきれい”という印象を持った理由と言える。と、ここまで書いて1つ見落としていたことに気がついてしまった。それはサンプリング・バイアスと呼ばれるデータ収集時の偏り効果である。具体的に言うと、国内にいるときには日没時は大抵オフィスにいるが、天津での引率では文化交流活動のため外出していることが多かった。津と天津で“きれいな夕日”の発生確率が同じであっても、空を見るという試行回数が多くなれば、夕日を見る期待値は上がる。さらに遠い昔に大学の一般教養で学んだザイアンスの法則(だったと思う)によれば、人は接触回数が多いものに好感を抱くのである。今回の私の天津に対する印象もサンプリング効果によるものであったかもしれない(とすればちょっと残念)。

ところで、私はこれまで夕日がきれいでないと主張する人に出会ったことがないが、ほとんどの人がきれいと感じるということは、夕日をきれいと感じることで何か進化の上でプラスに働く要因があったのではないかと推測する。“素直に感動できない理屈っぽい奴”と言われそうだが、どなたか理由を知っていたら教えていただきたい。

以上のようなことを取り留めもなく考えられる程、今回の研修では大きなトラブルもなく帰国することができた。まあ、そう思っているのは私だけで、林朝子先生の完璧な学生サポートと天師大の先生方のフォローのおかげに違いなく、紙面をお借りしてお礼申し上げる次第である。

天津師範大学 DD 留学生

2011年9月、ダブルディグリー制度による第1期天津師範大学生が三重大を卒業します。

三重大で学んだこと

時が過ぎるのは本当に早いです。まさに「光陰矢のごとし」です。知らないうちに、卒業が目の前に迫ってきました。でも、卒業でお別れするものも多いですが、新しくなるものもあるはずだと思います。

歩いてきた道を振り返ってみると、日本語を勉強することを通して、日本の文化、社会、日本人について、より深く理解することができたと思います。中国に「一つの言語、一人の人。二つの言語、二人の人」ということわざがあります。三重大で留学している間に、日本語を学んだだけではなく、新しい文化を吸収するとともに、新しい人となることができたような気がします。斬新な自分の道を見つけ、斬新な世界も目の前に大きく開かれていったと思います。

三重大で受けた講義で、考えさせられたことが多かったです。日本語を勉強しているおかげで、日本語で書かれた様々な知識や情報を知ってきて、理解することができます。以前より、より深く広い視点から自分の国のよいことやよくないところを冷静に見直すことができるようになりました。自分自身でもずいぶん成長したような気がします。授業で得られた知見は、自分の将来にやりたい職業において応用できるように努力したいです。三重大の先生方のような人生のモデルにいつも励まされて、どんな困難があっても、前向きに目的を持って努力したいです。先生方に心より感謝いたします。

日本語を学ぶ契機を通して、様々な人々の考え方や生き方を学び、自分の人生は豊かになっていくに違いないと信じています。日本での留学は私たちの人生にとってとても貴重な経験として意味づけられると思います。卒業した後、どんな職業をしても、中日両国友好のために架け橋のような存在でいたい。この場を借りて、あらためてお世話になった方々に深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

天津師範大学 DD 学生 劉妍



「5つの力」モニュメントの前に立つ劉妍さん